

市民皆スポーツ

1964年10月10日東京の青空に五つの輪が描かれた。日本はまだ多くの矛盾を抱えながらも、とにかく一生懸命だった。私は、学校の体育館が女子体操の練習場であったため、その後「プラハの春」を支持し数奇な運命をたどる名花チヤスラフスカを入り口から垣間見、野坂昭如的表現は世間を騒がしめたが、今となると流石さすがとなすいてしまふ。東横線の車中で池田敦子選手を、円谷幸吉選手に侍の魂を見つけ感涙し、東洋の魔女に踊った。▼この時、世界の若者文化は、その後の日本に体育の日を制定するに至る「スポーツ・フォー・オール」国民皆スポーツの考えを残してくれた。それこそが先進国としての手形でもある。現在、石狩市はスポーツ健康都市宣言を行い、市民皆スポーツを目指している。特に近頃は熟年層の意欲的取り組みが目立っている。「はりきりウォーキングラリーPart 2」の本列島縦断380万歩到達者は67人に達し、ベンチプレス120キロを持ち上げるという70歳台、病院にあつても毎日指を折る、カローリングを楽しむ障がい者たち ▼造語の達人福沢論吉翁は「体育」と名付けたが、少し押し付けがましい感じがしないでもない。「運動」では物理的である。「体操」でもない。言葉は時代を射抜くだけに、2020年東京オリンピック・パラリンピックは、新たな価値観をもたらしてくれるであろう。

(市長)

広告